

番外編 大阪の福島にて

彼氏
彼女

少年

おばちゃん

女

大阪、日本橋、国立文楽劇場の前。売れないユーチューバー、カレカノチャンネル（正式名称は彼氏彼女チャンネル）の二人が撮影（収録）をしようとしている。五月の頭、ゴールデンウィークの初日。もう日差しがきつい。

彼氏「ヒアりに噛まれてみたってどうかな」

彼女「いいんじゃない」

彼氏「……あーでも炎上するか。ヒアリだけに」

彼女「焼けちゃうから」

彼氏「ヒアリだけに？」

彼女「日に焼けるから」

彼氏「あっごめん、回すね（カメラ回す。3, 2, 1）彼氏で一す」

彼女「彼女です」

彼氏「カレカノチャンネルをご覧の皆さん、こんにちは」

彼氏彼女「彼氏彼女です」

彼氏「えー本日はカレカノチャンネル番外編として、なんと大阪に来ています。えーここはどこでしょう……（カメラを上部の看板に向けて）じゃーん、国立文楽劇場です。文楽って知ってる？」

彼女「……人形劇でしょ」

彼氏「まあ、一言で言ったらそうなんだけど、文楽っていうのは人形遣いと三味線と太夫（たゆう）、太夫っていうのは語りね。この、三位一体の芸術なんですよ。……あんま興味ないでしょ」

彼女「なくはないけど、大阪って言ったらもっと他にあるじゃん、たこ焼きとか、通天閣とか……あ！ あべのハルクス行きたい！」

彼氏「グルメロケは後のお楽しみということで……。 （チラシを見せ）今日はこの『心中天の網島（しんじゅうてんのあみじま）』っていう文楽を見てください。近松門左衛門は日本のシェイクスピアと呼ばれてて……」

彼女「あべのハルクスは？」

彼氏「あべのハルクスはあれだよ……では行ってきまーす（手を振る）以上、彼氏彼女でしたー（カメラ終了）」

彼女「……私をアホみたいにしないでよ。どうせネットの情報でしょ」

彼氏「……ごめん、でもみんな知らないからさ……（入り口を指差し）行こ」

文楽劇場へ入場。

終演後、出てきて。

彼氏「(カメラ回す。3,2,1) いやー、良い席だった。良い席だったね。だってこう、目の前にさ……人形って三人で動かすんだね」
彼女「……なんで泣いてたの？」
彼氏「だって最後さ、二人が別々に死ぬんだよ。互いを思い合っさ」
彼女「てゆうか、死ぬ必要あった？」
彼氏「……え？」
彼女「だって、彼氏がしっかりしてたらさ、死ぬ必要なかったじゃん。あんなクズみたいな貧乏人の男じゃなくて、もっとしっかりしたお金持ちのお侍さんだったら、幸せになれたじゃん」
彼氏「それはそうだけど……」
彼女「でも一番可哀想なのは奥さんと子供だよ、残されて」
彼氏「きっと、死ぬ以外なかったんだよ」
彼女「はあ？ 男に努力が足りないだけじゃん。もっと言うとそこまで好きじゃなかったんだよ、あの、小春のこと」
彼氏「……好きだよっ」
彼女「……」
彼氏「いずれにせよそんなハッピーな話、誰も惹かれないでしょ。報われぬ恋とか、叶わぬ結婚とか、そういう悲劇にさ、人は惹かれるんだよ」
彼女「私はハッピーな話の方が好きだけどな。だって救われないなんて苦しいじゃない。なんで惹かれるの？」
彼氏「さあ、自分より最低な奴を探してるんじゃない」
彼女「最低な奴？」
彼氏「うん」
彼女「だったら、そいつが一番最低じゃない」
彼氏「え、あ、そうね……あ、え一次はですね、福島というところに『占い商店街』という面白い商店街があるそうなので、行ってみたいと思います。以上、彼氏彼女でした」

福島聖天通商店街、占い館の前。

彼氏「(カメラ回す。3,2,1) いやーたこ焼き美味しかったですね。堂島ロールもお得に買えました。えー占いなんですけど、撮影がNGということで、また後でご報告します。以上、彼氏彼女でしたー」

占い館へ入る二人。

彼女占い館から出てくる。後ろから彼氏。

彼女「……ついてこないで」

福島区、下福島公園。ここはプールやジョギングコースなどがある巨大な公園である。区の花に指定されている野田藤も栽培されている。

先に行く彼女、後ろに彼氏。

彼氏「ごめん……」

彼女「もういいから」

公園のベンチ、頭上に藤棚がある。少年がベンチで寝ている。おばちゃんが座っている。彼女ベンチに座る。彼氏も少し離れて座る。

沈黙。

おばちゃん「先週まできれかったけど、すぐやね」

おばちゃん「あちこちに咲いとるからどこですかーゆうて」

おばちゃん「阪神野田のところはまだ咲いとるやろか」

おばちゃん「早めに切ったらんと来年咲かへんからね」

彼氏彼女「何……」

彼氏「何がですか？」

おばちゃん「吉野の桜、高雄の紅葉、野田の藤ゆうて関西の三大名所。知らんの？野田藤、福島の花や。……どこから来たん？ そんな荷物持って」

彼氏「東京です」

おばちゃん「学生さん？」

彼氏「いえ、まあ、そうです」

おばちゃん「ええ身分やね」

彼女「この人フリーターです」

彼氏「あ、ユーチューブって多分ご存じないと思うんですけど、そこで活動してます。まだまだですけど」

おばちゃん「えっ、ユーチューバーなん!？」

彼氏「え?! 知ってるんですか？」

おばちゃん「もちろん。HIKAKINとかヒカルとかマックス村井とか見とるよ。他にもたくさん……うちは下品なのが好きやね。どんな企画なん？」

彼氏「ああ、僕というか僕らは彼氏彼女チャンネルっていうチャンネルで……」

おばちゃん「(スマホを取り出し)見たるわ、なにになに……彼氏彼女でプリクラ撮ってみた。遊園地行ってみた。……普通やん、普通のカップルやん」

彼氏「いや、でも熱めのお風呂に入ってみたとか、ちょっと贅沢してみたとか……」

おばちゃん「仲良いんやな、羨ましいわ」

彼女「そんなことないです。さっきもお金節約してロールケーキの切れ端買ったり、たこ焼き一個ずつだったり。占いしてきたんですけど、あの、買っても占い商店街で。そしたら二人の恋愛運が最悪で、でもこの人のせいなんです。働かないし、将来のことも全然考えないし」

少年「(うなされたように)淀川大橋、船津橋、上船津(かみふなつ)橋、堂島大橋、田蓑(たみの)橋……淀川大橋、船津橋、上船津橋、堂島大橋、田蓑橋……」

彼氏「……大丈夫かな」

おばちゃん「(顔を見て)大変、この子顔真っ赤やで」

彼女「冷やす物、早く」

彼氏「あっ……どうすれば良い？」

彼女「タオル冷やしてきて」

彼氏「タオルは？」

彼女「(首に)かけてるでしょ」

彼氏「(水道へ)」

彼女「……(ペットボトルを取り出し)大丈夫? 飲んで」

彼氏「（戻ってくる、あたふた）」
おばちゃん「何つったとんねん（タオルを取り少年の首を冷やす）もう日差しきついからな。下手したら死んどったで。念のためその病院行こか」

彼氏彼女、少年を起き上がらせる。

少年「……堂島大橋に行かなきゃ」
彼女「病院行ってからね」
少年「彼女が待ってる……」
おばちゃん「おーやるやん」
彼女「じゃあ連絡しよっか、あれならお姉さんがするよ」
少年「……」
おばちゃん「堂島大橋ゆうたら、すぐそこやる。あれやったらおばちゃんが連れてきたんで」
彼女「彼女見ただけでしょ」
おばちゃん「ちゃうよ」
彼女「……彼女が好きなの？」
少年「（頷く）」
彼女「羨ましいな……」
彼氏「なんだよそれ」
少年「……福島だよ、ここ」
おばちゃん「せや」
少年「福島だよ、ここ」
おばちゃん「せや福島や」
少年「……彼女が待ってる」
彼氏「またそれかよ。この子、警察に引き渡した方がいいんじゃない？ 服も汚れてるし、もしかして家出少年かも。家に帰れない理由でもあるの？ パパとママと喧嘩した？」
少年「家出じゃないもん！」

少年、スマホを取り出し、ツイッターの画面を見せる。

彼女「ツイッター？」
少年「（頷く）」
彼女「『福島の橋で待っています』……福島の橋で待っています?!」
少年「うん」
彼氏「（スマホを見て）四月のツイートじゃん。これ誰？ お友達？ 同級生？」
少年「わからない……」
彼氏「わからないって……え！？ わからないの？」
少年「わからない……」
彼氏「pink51さん？」
少年「うん……」
彼氏「橋ってどこの橋？」
少年「五つある……」
彼氏「いやだから」
少年「ぐるぐるしてたら会える……」
彼氏「……（彼女に）この子おかしいよ。言ってることめちやくちゃだし、告ってもないのに彼女だなんて。立派なストーカーじゃん」
彼女「……弟子にしたら？」

彼氏「……」
彼女「これが最後のツイート？」
少年「うん」
彼女「……pink51、ピンクが好きなのかな」
少年「そうだと思う」
彼女「51ってなんでしょうね？」
おばちゃん「五月一日生まれ、おお、今日や。もしくはイチローの背番号やな」
彼女「……そうですね（笑）」
彼氏「……ねえ、もしかして探そうとかしてないよね、彼女」
彼女「悪い？」
彼氏「顔も名前もわかんないんだよ。いるかどうかもわかんないじゃん。釣りかもしれないし……」
少年「本当にいるもん」
おばちゃん「『君の名は。』やな」
彼女「えっ見たの?!おばちゃん」
おばちゃん「見てへん、でもすれ違い続けて最後には会うんやろ、君の名は言うて」
彼女「見てるじゃないですか（笑）」
彼氏「……アニメではうまくいくさ、アニメでは。でも、こんなことは言いたくはないけど、福島と言ったら東北の福島だろ。あの、震災があった」
おばちゃん「でも、この……うちらに言わせたらここが福島や」
彼氏「いえ、別に大阪の福島の人々を蔑ろにするつもりはないんです。ただ可能性が高い方を選ぶべきだと言ってるんです。今の時代『福島の橋で待っている』と言われたら、東北の福島を選ぶのが普通でしょ。そっちの方が確率が高いから。それを大阪の福島に行くなんて……。なんというか、こういう言い方はあれだけど、ひねくれてるよ、君は」
彼女「ひねくれてるのはどっちだよ、この子にしてみたら、何も変わらないじゃない。それに、東北の福島なら橋の数は数え切れないでしょ。確率でもさして変わらないわ」
彼氏「変わるよ」
彼女「変わらない」
彼氏「変わるよ」
彼女「……別れる」
おばちゃん「（彼氏彼女に）もうやめ、（少年に）他になんか情報はないんか？ メッセージとか」
少年「（首を振る）」
おばちゃん「写真とか何が好きとか何をしてたとか？」
少年「……お話だけ」
彼女「お話？」
少年「（頷く）」
彼女「お話、見ていい？」
少年「（頷く）」
彼女「（遡ってツイートを見る）すごい、たくさん」
少年「うん、毎日」
彼女「素敵なお話ばかり」
少年「うん」
彼女「私も飛んでみたい」
少年「（頷く）」
彼女「……バッテリーある？ カメラの」
彼氏「ああ、あるよ」
彼女「パソコンも？」

彼氏「うん」
彼女「放送するよ、生放送」
彼氏「えっ！？ 何言ってるの？」
彼女「ネットで情報呼びかけるの。pink51さんの耳にも入るかもしれない」
おばちゃん「おもしろなってきたで」
彼氏「え、ちょっと待ってよ。京都は？ 楽しみにしてたじゃない？」
彼女「……最後の放送にしたい？」
彼氏「何すればいい？」
彼女「これから生放送やりますってことと、今までの経緯をうちのツイッターでつぶやいて。で、影響力のある人に拡散させるの」
彼氏「拡散ってフォロワー300だよ」
おばちゃん「……おばちゃんの出番やな。（スマホ画面を見せて）ほれ」
彼女「おばちゃんチャンネル……嘘でしょ。あのおばちゃん？！ ジャスティンビーバーとも共演した」
おばちゃん「（鞆からマスクを出し）いつもは虎のマスクしとるからな。HIKAKINやはじめしゃちょーにも拡散してもらおうわ、おばちゃんならイチコロや」
彼女「ありがとうございます」
彼氏「……準備できたよ」
彼女「じゃあ、生放送いける？ おばちゃんも拡散お願いします」
おばちゃん「任せとき」
彼氏「（カメラ回す。3, 2, 1）彼氏です」
彼女「彼女です」
彼氏「カレカノチャンネルをご覧の皆さん、こんにちは」
彼氏彼女「彼氏彼女です」
彼氏「えー今大阪の下福島公園にいます。えー今日はですね、緊急に……」
彼女「皆さんに聞いて欲しいことがあります。この男の子が彼女を探しています。でも名前も顔もわかりません。情報は福島の橋で待っているってことと、pink51っていうアカウントネームしかありません。私たちのツイッターのリンクも貼っておきます。なんでも構いません、情報をお願いします」
彼氏「……ヤバ、視聴者数、三万超えたよ、まだまだ伸びてる。コメントもすごいよ。『協力する』『がんばれ一少年』『福島県でも見てるぞー』だって。……あ『少年、なんでその子が好きになったの？』だって。みんな気になってるよ」
少年「そ、それは……」
おばちゃん「なんやゆうてみ」
少年「つぶやきみてて、それで……」
彼女「それで？」
少年「……眠れなくて、牛さんを数えてたとき、あのツイッターを見つけたんだ。バツタの兄弟の話、白いへびの話、恐竜と戦うお話、近くにいる気がした。気づいたら朝になってる。でも思ったの、この人はどうやって寝てるのかなって。もしかしたらひとりぼっちなんじゃないかって。だから今度は僕がお話をしたいって思ったんだ」
おばちゃん「なんやねん、今告ってどうするんや。まだおうてないやろ」
彼氏「（笑）こっちも盛り上がってます。『全米が泣いた』『俺の横でも寝てくれー』って。……あれ、これなんて読むっけ？」
彼女「ん？ 蜷川……蜷川を探せ？」
おばちゃん「蜷川、蜷川ゆうたらここら辺を流れとった川やで」
彼女「流れとった？」
おばちゃん「せや、100年くらい前、キタの大火ゆう大火事があつてな、一面、焼け野原になつたらしい。そんな時の瓦礫を蜷川に捨てたんや。そんで蜷川は埋め立てられてしもた」

彼氏「……蜷川ってなんか聞き覚えない？」
おばちゃん「ほら、あれや、近松の曾根崎心中とか心中天網島にも出てくる川や」
彼氏「……文楽だよ、ほら今日見た。二人がたくさんの橋を越えて死に場所に向かう。その時に流れる川だ」
彼女「埋め立てと一緒に無くなった橋もありますよね」
おばちゃん「そりゃあ、そうやろな」
彼女「あんな文章書く人なら、無くなった橋の上で待っていても不思議じゃない」
彼氏「うん」
おばちゃん「不思議やろ、どう考えても」
彼氏「（鞆を漁って）……こいつの出番が来た」
彼女「あ、出た、五万したやつ」
おばちゃん「なんやそのメガネ」
彼氏「VRゴーグルと呼んでください。ボク、体は平気？」
少年「うん、もう平気」
彼氏「じゃあ江戸時代の福島にタイムトリップだ」
少年「（頷く）」
おばちゃん「なんや急展開やな」

彼氏、少年にVRセットを装着する。

おばちゃん「……古い地図でええやん」
彼氏「それは禁句です」
彼女「（手を繋ぐ）」
彼氏「……では、展開」

江戸時代の福島へ。

少年「おー」
おばちゃん「なんや、反応が薄いな」
彼女「何か見える？」
少年「紫色のお花。ここまで伸びてる」
おばちゃん「野田藤か、江戸時代は今の季節も咲いてたんやな」
彼氏「他には？」
少年「田んぼ」
彼女「田んぼ？」
少年「うん、ずーっと田んぼだよ」
彼氏「どんな田んぼ？」
少年「これくらいの高さで、緑色」
彼氏「僕らの姿は見えてる？」
少年「うん、服は違うけど」
彼氏「変換機能だね、どう違うの？」
少年「お姫様。……汚い人」
おばちゃん「うちは？」
少年「変わらない」
おばちゃん「（服を見る）何でやろ……」
少年「わっ、蜂だ」

少年、VRの蜂を払うように野田藤からちょっと逃げる。

彼女「大丈夫？ いないよ」
少年「……あ、あっちに家がある」
おばちゃん「おっ、川もあるかもしれんで」
彼女「そのお家の方に行ける？」
少年「うん……」

下福島公園を抜けて横断歩道を渡る。

おばちゃん「気いつけや」

堂島大橋の前へ。

少年「あ、橋、川もあるよ」
彼女「どこ？」
少年「そこ」
おばちゃん「堂島大橋の前やな」
少年「誰もいない？」
彼女「……うん、残念だけど。ここに蜷川が流れてるの？」
少年「うん、ここからあっちに流れてる」
彼氏「じゃあ、あのガソリンスタンドと、いわき病院の間くらいかな」

横断歩道を渡り、行こうとする。

おばちゃん「……うちはここまでや。いつ彼女が来るかわからんやろ。堂島大橋で待っとくわ。なんかあったら連絡するしな」
少年「……おばさん、このメガネで、藤のお花見て」
おばちゃん「うちは顔でかいからな。もう暗くなるから行き」
少年「ありがとう」
彼女「ありがとうございます」

お互い手を振り合う。少年は蜷川に行く。彼氏彼女は路地に行く。

彼氏「……不思議だね、普通の道なのに、この子には川が見えてる」
彼女「……そんなに不思議かな。……（少年に）何かいる？」
少年「よく見えない」
彼女「蜷はいるかな……えい（水をかける）」
少年「冷たいよ、えい（水をかける）」
彼女「もーやめてよ」
少年「……あっ、お魚」
彼女「どこ？」
少年「おじさんの足元」
彼氏「ざばーん（水をすくう）」
少年「やめろよ、逃げちゃうじゃんか」
彼氏「ざばーん（水をすくう）」

少年「……あ、橋だ！ 橋だ！」
彼女「えっ、どこどこ？」

少年「そっちにお寺ある?! その前!」

少年を先頭に走る三人。誰もいない。

彼女「……行こ」

彼氏「……ねえ、川の大きさとってこれくらい?」

少年「うん」

彼氏「(川を飛び越える) ほっ、よっ、とお……」

彼女「何してんの?」

彼氏「どう? 少年」

少年「落ちてるよ」

彼氏「笑ったでしょ、今」

少年「笑ってないもん」

彼氏「……おじさんにもお話してよ、彼女だと思って」

少年「やだ」

彼女「……おじさんは川を歩いてるうちに桃になって割られました」

少年「面白い……」

彼氏「も一勝手に殺すなよ」

彼氏「……前にさ、同級生が亡くなったって話したじゃん。あれ、震災で死んだって言ったけど、本当は自殺なんだよ、震災の前日に死んだんだ」

彼氏「……(タイ料理屋を見て) あ、モアイ。見て、すごい名前」

彼女「やめなさいよ」

少年「何?」

彼女「こっちの話」

彼氏「(ボクシングジムを見て。動きつけて) ボクシングやりたいな」

彼女「私も」

彼氏「君はやめたほうがいいよ」

彼氏「(道路の反対側を指し) 何あれ?」

彼氏、彼女、少年、道路の反対側へ。

彼女「逆櫓(さかろ)の松だって」

彼氏「ふーん」

彼女「あっ、カフェウインブルドン」

彼氏「(動きをつけて) 錦織」

彼女「もーそれしか知らないでしょ」

道路の反対側、不自然な位置で女がこちらに背中を向けて立っている。

彼氏「あ」

少年「あ」

繋いだ手を解き、走る少年。VRゴーグルはつけたまま。

彼女「車、危ないよ！」

少年には蜷川に架かる浄正橋に女が立っているように見えている。

少年「……あの」

女「……誰？」

少年「あ……」

女「なに？」

少年「あ……」

女「（スマホが鳴り、耳に当てる）うん、着いた。ABCホール？ ううん、全然待つてへんよ、来てくれてありがとう。あ、うちからも見えた（笑顔で手を振る）。もうやめて、恥ずかしいわ。……うん、うちも好きやで（退場）」

少年「（VRゴーグルを外す。辺りを見渡す。『浄正橋跡』の石碑を叩く）……浄正橋跡、うわー！！」

彼女「（近づいて）いやな女だったね」

彼氏「あの人は悪くないでしょ」

彼女「いやな女だった。いやな女だった……（背中をさする）」

少年「……福島に行けばよかった。福島に行けばよかった。おじさんが言ったみたいに僕がひねくれてた。僕が間違ってた……」

彼女「何も間違っていないよ、だって福島じゃない。何も間違っていないよ……」

彼氏「（スマホを見て彼女に見せる）……見て、おばちゃん。堂島大橋なう」

彼女「何これ。めっちゃ男引き連れてんじゃん、てゆうか虎のマスクしてるし」

彼氏「下にスクロールしてみ」

彼女「……え、嘘、橋がいっぱい。……淀川大橋警備中、船津橋なう、上船津橋で待つ、田蓑橋なう……ツイッターが橋で溢れてる……」

彼氏「コメントもやばいよ『東北の福島の橋にいます』……『己斐橋（こいばし）にいます。広島の福島です』」

彼女「……ねえ、みんな君の彼女を待ってくれてるよ」

少年「……気持ち悪い。本当に気持ち悪い」

彼女「え？ 大丈夫？」

少年「そうじゃなくて嘘ついて」

彼女「嘘じゃないよ、（スマホを見せて）ほら」

少年「絶対来ないのに嘘ついて」

彼女「来るよ、来るかもしれないじゃない」

少年「本当に来るって思ってた？ この人たちもそう思ってるの？」

彼女「少なくとも私はそう思ってたよ、思ってるよ。もちろんお祭り気分の人もいるかもしれないけど」

少年「……これ返すよ（VRゴーグルを返す）。みんなに見られて、彼女が一番嫌がるのに。本当だけが希望なのに……」

彼氏「……君だって来るって信じてたから、熱中症になっても橋をぐるぐるしたし。彼女のおかげで眠れたんでしょ？ 本当じゃない？」

少年「……僕はただ、あそこで寝てただけだもん。彼女なんてはじめからいなかった」

彼女「嘘」

少年「本当、全部僕が作った作り話だもん」

彼女「ツイッターは？」

少年「ツイッターは……」

彼女「本当でしょ？」

少年「でも見えないと意味ないよ、体がないと」
彼氏「さっき、VRでも楽しかったじゃん、水遊びしてさ、よかったらおじさんのとこ遊びに来る？ 東京、狭いお家だけど」
少年「おじさんたちはいいね」
彼氏「よくないよ……いや、いいよ」
少年「ほら、いいんじゃない、僕たちは幽霊だから」
彼氏「幽霊？ なんかの代表みたいに言うなよ、さっきから。おい、バカ、一人の問題だろ、子供だからって無垢でピュアだなんて思っていないからな」
少年「バカって言うなよバカ」
彼氏「なんだよ、バカ」
少年「バカ、バカバカ」
彼女「ちょっとやめなさいよ」
彼氏「こいつが世界を知ってる少年みたいな顔してきたから、キモいと思っただけだよ」
少年「……こんな世界なら死んだほうがマシだ」
彼氏「ほら、とってつけたようなセリフだ」
少年「あの人形の話みたいに」
彼氏「飛び降りてみろよ、橋なんてないぜ」
少年「車にぶつかってやる……」

少年、道路に出ようとする。激しく取っ組み合う二人。

彼女「やめなさいよ、二人とも」
彼氏「大人の力をなめるなよ、こら」
少年「……ここはどこだ？」
彼氏「福島だよ、バカ」
少年「……ここはどこだよ！？」
彼氏「福島だよ」
少年「……おじさんには負けない……」
彼氏「そんな悲劇で終われると思うなよ」
少年「……希望なんてない……」
彼女「……（道路の方を向いて）嘘?!」

彼氏、少年、同じ方向を見る。

彼氏「あっ」
少年「あっ」

(了)